

本屋のいいところ

本屋さんはいくまで「商売」として店を開いているので、本が賑やかに陳列され、活気があるのが好きです。書店員さんが「いかにお客さんに手に取ってもらえるか」を考えて作った棚は、となりの本どうしも有機的に並べられているので「あっ、この本も」と思わず手が伸びてしまうこともしばしば。お客さんとしてだけでなく、出版営業の取引先としてもいつも大変お世話になっております！

図書館のいいところ

最近出た本と数百年前に書かれた本、有名な作家と知る人ぞ知る作家、ベストセラー小説と難解な哲学書。図書館ではそれらの本が平等に一冊ずつ背を向けて並んでいるのが好きです。ここでは市場原理は働かずに、本たち一冊一冊に定位置がある安心感があります。いまはなくなりつつある「貸出票」をみて、この本がこれまで誰にも借りられていなかったと気づいたときの、なんとも言えない高揚感がたまりません。

思い出の1冊との出会い

小学生のころに夢中になったのは、カードゲームのレアカードのように煌めく表紙、少年心をくすぐる冒険譚でお馴染みの『デルトラ・クエスト』です。人気があったので学校の図書館は貸し出し状態。近くの図書館を回ってやっとこさ借りられた記憶があります。先日某古本の大手チェーンで久しぶりにこのシリーズを見たのですが、10年以上経っても変わらないキラッキラの装丁で、見た瞬間に小学生時代の思い出が一気に蘇りました。

株式会社ミシマ社 京都オフィス
営業チーム 田渕洋二郎

東京と京都の2拠点で活動する、原点回帰の出版社・ミシマ社の営業チームに所属。最近はMSLive!(生きた言葉を届けるミシマ社主催のオンライン配信イベント)もスタートし、日々面白いライブをお届けしています!

本屋のいいところ

えほんはこどもと仲良くなるための道具。ただ同じえほんを何度も使っていると、だんだん新鮮さがなくなってしまいうんですよね。読み手のワクワクが消えて、こどもを喜ばせる作業みたいになっちゃう。そんなときには本屋に飛び込みます。そうすれば新刊がちゃんと並べて置いてある。僕にとってはワクワクの補給スタンドです。

図書館のいいところ

こどもの頃に『かいじゅうみんなで作りますか』というえほんが大好きでした。図書館で再会して本を開くと、ふと昔の感覚を思い出す、そんな1冊。そう考えると膨大な本が眠る図書館の書庫はみんなの思い出の保管場所なんですね。そして本から広がるこどもの未来も詰まっている。図書館は時間を超えた不思議な箱ですね。

思い出の1冊との出会い

暗闇が怖いこどもでした。古い家で、夜になるとひとりで2階への階段をどうしても上れなかった。考え抜いて僕は名案を思いつきました。階段の下で怖い声で「おばけえ～」と言って自分がおばけになってしまうのです。同類になれば怖くないからね。そんな時ともだちになってくれたのが『オバケちゃん』（松谷みよ子 講談社）でした。オバケちゃんからおばけのあいさつを習った僕は、少しだけ暗闇との折り合いのつけ方を学んだ気がします。

大阪東こどものとも社 広報主任
よみきかせボランティアグループ
三丁目の鷹 主宰 鈴木健司

えほんに興味がない、座ってられない、すぐ手が出る、日本語がわからない。そんなこどもと一緒に笑って過ごせる、こどもとこども、こどもとおとなが仲良くなるためのよみきかせができればなあと、あちらこちらでえほんを読んでいます。

本屋のいいところ

仕事柄、社会の状況やその変化に敏感である必要がありますが、多くのジャンルの最新の本が並ぶ書店は、それにうってつけの場だと思っています。それぞれの店主のアンテナで選ばれた本が並ぶ個人店ならではの出会いも楽しいですし、チェーンの大型店で「こういう本が売れてるのか」とか「この人また新刊出たのか」とか考えつつぶらぶら流すのも好きです。

図書館のいいところ

万人に開かれているところ。誰もが、これまでの知の集積にアクセスできる貴重な場だと思っています。

思い出の1冊との出会い

小学生の時、漫画じゃなくて字の本を読もうと思って書店をうろうろして変なタイトルの本が目についた。それが読書の入り口でした。

その本の名前は『わしらはあやしい探検隊』（椎名誠）。

いい大人たちが、無人島とかで焚き火して宴会しつつバカやってる話を読んで「いいなあ、早く大人になりたい」と思ったものです。

絵本編集者 筒井大介

1978年大阪府生まれ。絵本編集者。担当した絵本に『ネコツメのよる』（町田尚子）『えとえとがっせん』（石黒亜矢子）『ブラッキンダー』（スズキコージ）『オオカミがとぶひ』（ミロコマチコ）『オレときいろ』（ミロコマチコ）他多数。編者として関わった本に『あの日からの或る日の絵とことば 3.11と子どもの本の作家たち』がある。

本屋のいいところ

好きな本屋さんでゆったり時間を過ごした後は、心の温泉に浸かったような気持ちになります。特集コーナーやトークショー、原画展など、本をめぐる出会いの場作りに書店員さんの本愛を感じてグッときます。絵本専門店や旅先でふらりと入った本屋さんで、そこでしか出会えない本に出くわした時も、うれしくてニヤニヤしてしまいます。

図書館のいいところ

児童図書研究資料のコーナーなど、一つのジャンルの源流をたどるような本をじっくり読めるのがうれしいです。大人になってから、図書館でさまざまな絵本と出会い直せた事も、絵本を作り始める大きなきっかけになりました。資料を探す時、相談窓口で相談すると、書庫の本を含め、一緒に本を探してもらえるのも、すごく有難いです。

思い出の1冊との出会い

去年秋、MARUZENジュンク堂梅田店の児童書売場に設けられた本棚「おとなりどうし〜にほん、かんこく、絵本でこんにちは」の前に立った時の、ズーンとした衝撃が今も残っています。「なんでこの本を知らなかったんやろ」「こんな本の作り方があるんや」 その本棚の中で、チョウンヨン作『はしれ、トト!』の原書『Run Toto!』に出会いました。その線、色、絵の展開…何度見ても発見のある大好きな絵本です。

絵本・造形作家 こしだミカ

大阪生まれ。絵本に、『アリのさんぽ』『ねぬ』（ともに架空社）、『ほなまた』（農文協）、『くものもいち』『いたちのてがみ』（ともに福音館書店・こどものとも）、『でんきのビリビリ』（そうえん社）、『ドンのかち』（佼成出版社）、『ひげじまん』（小学館）、『カイロ団長』（宮沢賢治作 ミキハウス）、『ナマコ天国』（本川達雄作 偕成社）など。

本屋のいいところ

目当ての本以外との出会い
があるところ。
エネルギッシュなところ。

図書館のいいところ

静かで落ち着くところ。
勉強がはかどるところ。
勉強した気になれるところ
(笑)
それと、本や漫画がタダで
座って読めるところ！

思い出の1冊との出会い

お兄ちゃんが買ってきた「ハリーポッターと賢者の石」です。当時小学生で、夢中で読みました。新作が出るのを兄弟で心待ちにしていました。謎のプリンスあたりからお兄ちゃんが買ってこなくなっちゃってまだ完結していないんですが（笑）。カナダに留学中、賢者の石の洋書を買って読みました。日本語版を何度も何度も読んでストーリーやセリフを覚えていたので、英語でも読める！と感動したのを覚えています。

株式会社Big Hug

代表取締役 関谷昌子

2014年、創業70年の有限会社扶桑印刷社の新規プロジェクトとしてオリジナル絵本ギフトのBig Hugを立ち上げ。幼児教育の専門家という立場を活かしながら多数の絵本ギフトを手掛け、様々な企業とのコラボレーションも展開中。第一回 近畿経済産業局主催・女性起業家応援プロジェクトLED 関西ファイナリスト。

本屋のいいところ

なんといっても、新しい本と出合える場所。自分の本として自宅に本をお招きするための出会いの場です。そして、新しい本の何とも言えない良い香りと表紙をめくるときのワクワク感がたまりません。

図書館のいいところ

いろいろな時代のいろいろな本に出合えます。静かでゆったりとした時間が流れる図書館は、本とじっくりと向き合える空間です。

思い出の1冊との出会い

会社のツイッターでは記念日についてのツイートをすることが多いのですが、昨年の「絵本の日」にイラストレーターの吉田尚令さんが描かれた絵本『星につたえて』を好きな絵本としてご紹介したところ、何とすぐに吉田さんからお礼のツイートがあり、さらに吉田さんは弊社のキャンディを購入、そのお礼として私は吉田さんの新作絵本を購入するという暖かな交流が生まれました。きっかけになった『星につたえて』は大切な一冊です。

パイン株式会社 係長 マッキー

パインアメのメーカーであるパイン株式会社の公式ツイッターを2010年から担当。日々様々なキャンディにまつわる情報をツイートしている。著書に『攻めるロングセラー』（クロスメディア・パブリッシング）がある。